

花鳥餘情

一

6 5 4 3 2 1 0 60 70 80 90 100

三十合十

第一

相奩

第二

龜末

第三

宣焯  
文部



僧正慈惠

あはれとまづくつゝ物のふらむ紫とまづ  
けのまへ中ふるみにまづてあはれあはれ  
やまとほほほよす事力くまわすとうむとくげはよ  
えくよまくあれ國のまことの源氏の物語よアハレ  
あはれ是ふよりせよよとあらわゆかてれ  
鳥がまくとあらわゆのには仰せよめしに  
雪帝の功とひじとをとひよせれと仰ゆ  
おはすつよとあらわゆくとひよせれとやく  
も折中のと称すとよくと折もの道とえに  
とよきと筆の海とすまづてあはれあはれ  
魚と魚の材と角つてくとせよまづて充て  
ちづてりういあはまちとけたしよまづて

大英圖書館  
藏書

先達のとてはひどい事だ  
あらへても、ほんの少しある眼のあつた者も、  
衣食雑情とおなじく思つた。

作意

紫日光を有る。皆云此あらけれりにす。雲と  
うかひの渦を、みゆきのまへる。すゑのまへる  
の物。行つてあらま。東の内ゆく。かがみ  
ゆきのふの西風。うきよゆく。ゆく。ゆく。ゆく。  
あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。  
ゆきのふの西風。うきよゆく。ゆく。ゆく。ゆく。  
あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。  
ゆきのふの西風。うきよゆく。ゆく。ゆく。ゆく。  
あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。

物の如きて自ら純潔なる所  
に付する物



ん源氏の才一と仰づまわぬ、向ふの者を統率する事  
考証是の行はるゝ才三化孫の虚言を僕養ひて  
事を有むべし。但東日令丁之不守統へ但是威羽扇と  
七羽の更れへて不守物未か子細へ輩不文奇是也  
古今接觸あるて當時則一率院付と思つて此を普通  
物歟

### 花鳥鶯情第一

相應

凡幸ア祐の奉行者、冥の意あつて仰づまき歌  
トヨトヨニヨリ仰と云ふのニシテ、冥めにうけ仰すを  
申し名トセテ、天台の教、四諦の法門、アモ有門  
ニミ宣門、亦有非宣門、也有非宣門、一切の言教は  
仰け奉り、刀入アマツ。

四諦は、生と死に、故、歸外別ら法性とぞ極ち  
真實の道理、書教のかつて、仰せ御す相應の事、  
仰てつまく、ゆきゆきの無縫、りそ、無縫  
の事、仰け奉り、刀入アマツ。

仰け奉り、而て、女房更衣あまつて、いはく中  
ノアシ事、うりの事、あらわして、まじめに、御  
け居、教説の仰すて、充満、その毎朝つゝ更衣、行持  
あり、一切、アモ、ある、ある、ある、ある、言ひます  
やあて、首をうしろに、やひと、さうは、おもて  
と、脇のあまと、仰け、うりの事、つゝと、われねね  
されや、い事、うりと、うりやみの、あまと、やんや  
もし、すう。

ふるふくらむすみゆき  
さうつひまむらを倒しゆきせんと  
やてゆきの里へ出まとひまちぬくらむ  
アキシムもすとひまつてひをくわゆ  
相達の門のまかせたれき事と唐の名家の  
楊達杞のまかせたれき事と長  
恨うの句とて一までの始めとわからぬ事  
とくとて楊達杞のたれき事とひきこりを坐  
りゆきゆゑの意起されてかくわ  
あらわゆ  
二軒と身とすれ算えまわる  
あめとひよと人へはとむとよなとくわらと  
たれこむとよとくわらと

日暮れのまゝで、うつむきに坐る。左の手は、  
絹と布の上をもぎあわせゆく。右の手は、  
机の上をさわる。あくや（よ）もそ  
きまゆ（まゆ）を（まゆ）ふくらむ。左の手は、  
机の上をさわる。あくや（よ）もそ

物のよきを思ふ事より  
かくのうきゆうのやうに  
あたはりとておもひ  
る事よりはまことに  
おもひてゐる事よりはまことに  
おもひてゐる事よりはまことに

むくゆもとよかくすらう  
まくはりてんよお  
いおきよまの  
ほのまにあまがなれやう  
すくはく前

丁巳仲夏  
曹司馬

近時雜言之凡余輒草草記入內裏  
乃內親王限四明石は未だ令嬢三位

今素還明は後漢の事より  
素還明は内無ふ  
たゞすが東の宣明口の中、あはば清々な西の陰  
明門の内にあけむる所よからずありまし

卷之三

行ひよるのまゝとありまうわせりてよしむ  
よおもととアリテアリ延喜式よまくな御朝ヨハ  
御内侍の御事と云ふとシカわゆのじよあひきの御事  
除と申すの門の外は圓門と申すと門と申す  
併しか思はず角門と申す  
車の衣のうよアキアリ  
令達ノリと思アリと申す角門の内を多く  
リヨリと仰意を心うやまつあつて極に多く(まき  
多)はあつて仍へや角門  
らかがまのうよ事うまつて行ふんと申す  
行角門の行うれ理分明う宮之參服の掲と申す  
今義解云謂本底人充日陽主東底人と七事主トの  
人と申す者アト外の事も申す時より御事行ふ

義之書狀の傳の事は、その體文とて、あくまでも事は  
それよつて、如往古の別名を曰く。下  
かく、本とて、其の事は、  
鳥部の事也。

卷之三

肉身のアーヴ  
命根子、  
死ぬままで

あくまのともの

それより執事の仕事

わざと書いたりゆる

さういふ執事はやの

まちがひをいたす風のものとおもひておもひてやれ

官隊のことを思ひださずすむじよの風とすむ

おもむくおもむの拂事あり

きれきれの心のやうをかく

絶えずとよひたまへらひながらおもひ

のあうとよしとよしとよしとよしとよしとよし

しまゆやせひとよしよしよし

（もあもあ）金ぬの匂のやすよしよしよしよ

（もあもあ）おもおもおもおもおもおもおもおも

まじめのまじめのまじめのまじめのまじめのまじめ

もももももももも

えをひづゆと 車のうねあ

おもおもおもおもおもおもおもおもおもおもおも

昇廟の今いの男女おもおもおもおもおもおも

わすれとおもおもおもおもおもおもおもおもおも

長恨寺の席をすむ院のうやうやうやうやう

をひくやすとおもおもおもおもおもおもおもおも

も根きれやすとおもおもおもおもおもおもおもおも

御手ておもおもおもおもおもおもおもおもおも

の席をすむおもおもおもおもおもおもおもおも

おもおもおもおもおもおもおもおもおも

見ゆゆゆゆゆゆゆ

たゞやくも見ぬあらわし  
さへあらずかのうむすめ  
まづけあゆみとてあらわし  
臨印道幻術

蓮葉ごよみにて標考せりありて至家の處  
は下付相ち此うの可方のゆればあまく  
付金額銅合カタけこのやとある半ハ門  
たゞひよりも根元にのせやすゆまの令シテ門  
のばすてよ衣の身ヒメ付れわく  
ひあまと相なやく物モノとすまよ  
うきうと相なシテ身ヒメとすまよ  
まれよあつて有ねりまよふりまよす  
るまよあつて有ねりまよふりまよす

（とくまわう）

ゑにうすすきのむらがくらひゆま焉とくわを  
あてうれうるくられ併とすむくわがたえまは  
ねようとくうの柳をあふかくつゝがくらは  
あひくわくうくよくひくわくうくわく  
じれうけうけん 紅葉自筆の款行す中も  
らうの柳のうるそうだちくあはせをくらす  
れとくのうにこくに解くわやあ相の草に  
ま実柳の御あく解くわやあしのからま  
毛根うの納うほくとくまくまくまくまく  
五音相通ひ

さくうすくけうすくあくゆくまくまく

風うきうきうきうきうきうきうきうきう  
をくうたう

けのとまゐる想のまがくうのくすまうす  
ううつるのまゑのからあといとおぬくすま  
れとくうくまくまくまくまくまくまくまく  
えくまくまくまくまくまくまくまくまく  
わきうくうくうくうくうくうくうく  
まのくうくうくうくうくうくうく  
まきの柳のうくうくうくうくうく  
あくわくわくわくわくわくわくわく  
うくうくうくうくうくうくうく

おひりのまへるもあらまくとおひりをよみすま  
わくと身のつかひのまくとおひりをよみすま  
後後緒のおきひきはやめに一筆手の手一筆あらは

くつこともす)とす

あくゆもあてとあひづつよけあるすまと  
をくらむが(さり) 春育吉短日高起とお娘  
うすうれどあくゆもあてとほゆくあお  
唐の主家の楊ちんと寢一宿の事」とう  
きつねの門をくえつてあくゆとお歌を  
のあきり。万村のすくらんとお打てたすよ  
されどもよ羽あひ落とすくいとおお  
おお半のあくゆが(さり)とおうかくおき

うぬふ行てくきてあくゆとお

四つまくわすとやすくお

拂書船の拂書考證或の風貌政要とよます  
きの博古續考拂書考證序五は高復此詩ミシマ次高復續  
五字が先皇天子御よめの書始よめうから事とある  
うぬうぬうぬうぬうぬうぬうぬうぬ  
うぬうぬうぬうぬうぬうぬうぬうぬ  
物のうぬうぬうぬうぬうぬうぬうぬ  
かくらむが(さり)おおひじわゆうきくま  
うくらむが(さり)おおひじわゆうきくま  
うくらむが(さり)おおひじわゆうきくま  
うくらむが(さり)おおひじわゆうきくま  
うくらむが(さり)おおひじわゆうきくま

不<sup>ト</sup>よ<sup>ヨ</sup>う<sup>ウ</sup>事<sup>ト</sup>み<sup>ミ</sup>ア<sup>ア</sup>ん<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>キ<sup>キ</sup>入<sup>ル</sup>  
ま<sup>マ</sup>う<sup>ウ</sup>し<sup>シ</sup>に<sup>ニ</sup>や<sup>ヤ</sup>く<sup>ク</sup>し<sup>シ</sup>い<sup>イ</sup>く<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>門<sup>ム</sup>ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>ま<sup>マ</sup>る<sup>ル</sup>  
寅<sup>タ</sup>年<sup>ニ</sup>の<sup>ノ</sup>虎<sup>タケ</sup>諱<sup>ハシ</sup>ア<sup>ア</sup>シ<sup>シ</sup>テ<sup>テ</sup>日<sup>ヒ</sup>者<sup>ハシ</sup>ア<sup>ア</sup>シ<sup>シ</sup>テ<sup>テ</sup>心<sup>ハシ</sup>  
の<sup>ノ</sup>き<sup>キ</sup>い<sup>イ</sup>や<sup>ヤ</sup>く<sup>ク</sup>れ<sup>レ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>う<sup>ウ</sup>き<sup>キ</sup>す<sup>ス</sup>ま<sup>マ</sup>ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>阿<sup>アハ</sup>ル<sup>ル</sup>キ<sup>キ</sup>ム<sup>ム</sup>ア<sup>ア</sup>シ<sup>シ</sup>テ<sup>テ</sup>カ<sup>カ</sup>ト<sup>ト</sup>リ<sup>リ</sup>

職員令の事務室と仰ゆ  
主とよやうもん信義と申すを有  
百済國より來れりと申す  
よほまこととく又は肝の肝の筋の筋と  
財物と曰ふ事もひよの肝あらへりと申す  
余の財通事よりまあて西園の事と

五  
卷之三

かのよしとお  
帝よりまへるをいたりとす  
ゆ事やあむかやあらがふとせと  
すすりてれとすと相  
くみのあとひまえ院の下にゆき  
おとづれとあゆみのあとひまえ院の下に  
チ子と輔佐とすとあゆみのあとひまえ院の下に  
歸とゆきとあゆみのせとあゆみのわゑ

苏东坡直指方正相之

壬午二月、予明ニ相見ニ至り。想  
もあらう事多のけど、のちやうむとて、  
物語に附す。而て、すて、音ふうあるぢるを  
みふと仕立ゆきあとて、童子の内物を宣下  
ひゆうきく。空手うち、身中、元服し。はる  
これより、其の朝ととなりて、御子の御  
一月の誕生つあはん。と、もあはん。門やす  
まうとあり。不日、其じまこと、もあはん。  
そのと、右大臣の女房、アセムテ、セモラ  
シテ、御子の御子と、御對て、御子の御  
くわくの御子と、御對て、御子の御  
今御子の御子と、御對て、御子の御

ノリノリ  
源氏の御子を、まく、嵯峨天皇は在年。萬  
安て、母、深羽長の母、すて、源氏の母、始  
醍醐の御子。明和の元服。是の源氏の母、たま  
玄宗院。宇治の例。

お京ノ御子を、まく、嵯  
峨の御子を、まく、源氏の御子を、まく、  
お京ノ御子を、まく、源氏の御子を、まく、  
お京ノ御子を、まく、源氏の御子を、まく、  
お京ノ御子を、まく、源氏の御子を、まく、  
お京ノ御子を、まく、源氏の御子を、まく、  
お京ノ御子を、まく、源氏の御子を、まく、



官記すも薦衣と曰ふて元服の如きは絶服の薦衣  
とぞアフリト一但延年總び家式云真佐<sup>及</sup>清薦<sup>シテ</sup>と云ふ  
トモテ長和二年三月廿三日行成而記云彰冠而玉着  
薦衣<sup>其序ある也</sup><sup>稱</sup>清薦<sup>シテ</sup>總記の意<sup>シテ</sup>總記云清薦<sup>シテ</sup>と云ふ安  
と奪釋<sup>シテ</sup>せ待<sup>シ</sup>薦衣と云う所<sup>シ</sup>と云う也  
ああア<sup>シテ</sup>さうしたがふ御子の服或称紀<sup>シテ</sup>用  
時<sup>シテ</sup>ア<sup>シテ</sup>總記云清薦<sup>シテ</sup>二<sup>ノ</sup>ア<sup>シテ</sup>ア<sup>シテ</sup>行<sup>シ</sup>たが薦<sup>シテ</sup>と云  
之<sup>シテ</sup>今文の薦衣と相生<sup>シテ</sup>ア<sup>シテ</sup>行<sup>シ</sup>たが薦<sup>シテ</sup>と  
之<sup>シテ</sup>今文の總記の如きを薦<sup>シテ</sup>の物<sup>シテ</sup>相生<sup>シテ</sup>行<sup>シ</sup>たが薦<sup>シテ</sup>と云  
計の事<sup>シテ</sup>に云う<sup>シテ</sup>行<sup>シ</sup>たが薦<sup>シテ</sup>長和二年<sup>前</sup>の事<sup>シテ</sup>西<sup>シテ</sup>抄  
一<sup>シテ</sup>序<sup>シテ</sup>未<sup>シテ</sup>元服の如<sup>シテ</sup>モ<sup>シテ</sup>薦衣<sup>シテ</sup>あ<sup>シテ</sup>か<sup>シテ</sup>薦<sup>シテ</sup>紀<sup>シテ</sup>  
税<sup>シテ</sup>用<sup>シテ</sup>

之子也。故其子曰  
子房。

白雲の御子の事  
は、  
かくかくの御子の事  
は、

とておもひてあつた

も爲と云ふ事あつた内に  
ありすが、あくまでも、みちづ  
りの事で、もとの階よりは前の方  
の、まだ序章ともいって舞踏場やアマ  
モモツの戸室うつろそれあつて、かゝ  
いたるだけの、あの舞踏アマタノ所  
をうつすものである。家の主は、  
おもと、この鷹舎の、おのの主筆  
をうわせ、近頃は、方  
圓の事と首を、おまかせし、

但初まゆゆの元服より生れり生物。丁度  
わくらに家してのうの朝あつ禁中の御子で  
多うかとてとてつてくとある事へ在る  
アホアホがうやうけめの作様也

國史云陽成天皇元慶七年七月八日己卯江年也  
以來主鷹司助信飼人大サナ人食斬毎月充役  
其中割烹飼十人六十斤斬足利義滿免藏人不自觀三年以迄  
置官人折半停足利義滿今鷹飼十人六十斤斬承以食  
免藏人不

村上天皇御記天德五年六月廿日石壁奥不進焉大  
於侍所修助信朝忠和古今中故御奉幸仲道  
喪足利義滿而以原教權足利義滿而御宿足利義滿御御襄  
平儀寺並房御烹飼

小石記云天元七年四月廿五日從前御烹人聽大  
牙令舊物足利義滿今日御便侍後足利義滿東帝辟背鷹去  
自侍不作御簾下御御足利義滿之不與出御奉幸太白仙  
花門既御前令賈足利義滿名奉幸其後石大飼本侍若奉  
大教足利義滿勤足利義滿班御足利義滿御奉幸大行奉青高  
次賜近江信足利義滿不濟御烹人御御爭相取足利義滿御御  
支須奉官足利義滿御御足利義滿御御足利義滿御御  
者足利義滿先例乞御烹人御御足利義滿御御

右元服の時見訪るの川牛物、亨る事す例

東郭西記天慶五年十一月廿二日盛明源氏西元服至博實賴西加冠禮西大内加馬西一頭西而有子

同記天慶五年十一月廿二日盛明源氏西元服至博實賴西加冠禮西大内加馬西一頭西而有子

右元服引人の従西元服西の例西但西は例西し  
禁西牛西亨西る事西例西小

同記天慶五年十一月廿二日博實賴西元服至理髮西加鹿西

同記天慶五年十一月廿二日博實賴西元服至理髮西加鹿西  
而有子

右元服引人の従西元服西の例西但西は例西し  
禁西牛西亨西る事西例西小

東郭西記天慶五年十一月廿二日晚景西源氏西元服至博實賴西加冠禮西大内加馬西一頭西而有子

右元服の時見訪るの川牛物、亨る事す例西

入らんとこやうが枝<sup>枝</sup>感<sup>感</sup>をあらねえ  
服の内<sup>内</sup>も鉢物<sup>鉢物</sup>あるまつて、雨でぬれまつて  
さすり付<sup>付</sup>せり一人舟<sup>舟</sup>もとまつて、ぬまうて物  
さすりわざと首<sup>首</sup>の入<sup>入</sup>參<sup>參</sup>え某<sup>某</sup>のせり下<sup>下</sup>熱<sup>熱</sup>とて  
あく物<sup>物</sup>のひと參<sup>參</sup>とすの堅<sup>堅</sup>た毛作<sup>毛作</sup>とてよた  
ます<sup>ます</sup>まさら腰<sup>腰</sup>ア内<sup>内</sup>腰<sup>腰</sup>ります<sup>ます</sup>まさら腰<sup>腰</sup>  
一<sup>一</sup>セの便<sup>便</sup>のえ服<sup>服</sup>と鉢物<sup>鉢物</sup>うるさくや<sup>や</sup>けわ<sup>わ</sup>の  
白<sup>白</sup>いふらあ<sup>あ</sup>とくづきや<sup>や</sup>とくづきの  
二<sup>二</sup>セの便<sup>便</sup>のえ服<sup>服</sup>うしとむか<sup>か</sup>まの内<sup>内</sup>側<sup>側</sup>ともと  
ぬゆうと石<sup>石</sup>うらまくぬうて用<sup>用</sup>參<sup>參</sup>とむまや  
さき様<sup>様</sup>のかじり

生食之无味也。其味之有味者，惟通氣者耳。

とましよの西郷の手相  
御手元服の内、紅白の毛皮  
御もと毛皮を御手元服  
御毛皮下の毛皮。いはすすめの脚  
え眼の内、事と見ての角  
あみの内、アリてみや  
のやう

不思議にうかがふてのうつあはれにもうとく  
みをうづきぬます さうかくあるゆきのまの半  
二ふてえ咲ますのま とくにわざとくにそ  
さとくのちづアトモト やまとやひやひ  
きむせんとみあはれ さみゆくまえの

中とあまくは  
うとうとてひ  
くの風物の中

宗家の御子で大歎國川の言ひすゑ  
院と申すは、いわゆる御子也  
は御内、二年生の御子也と  
正月一年の御子也と名  
の二年生の御子也と云ふや  
かひ本生すまうや、いふて  
おもひが二年院アツミの御子也

花自餘情序二

第  
三

二十一

以教る事名はじめの事とあつてす  
年中わざり作ハ育月とアラソリ  
相違のまゝあたゞ氣までわざり  
アラソリチモノの事 物ハラソリ首  
相違のまゝ相とけるのハウソロシのとけん  
三年の事よりハき  
もからずハスの

はまくらの物語

とひまくわすれぬは東のものか而乃ひまく  
うそとも思ひぬつゝてうへてはるる  
あらまにりきるうつきてといきれゆきまち  
まきとくわゆれりまゆとくはくあらま  
けのゆのゆはおさなはりゆとくはくを  
あらまとくはくあてきかうてきのひくす  
あらまとくはくあてきかうてきのひくす

事は嘗ての如きの如き  
あらゆる所にておまか  
うなづくのをよしとす

まつりひまわり  
おみやげ

あまくいはうてのるよれか  
おまくいはうてのるよれか  
おまくいはうてのるよれか  
物をわざひむむむむむむ

か  
か  
せ  
わ  
こ  
や  
く  
れ  
あ  
ら  
ま

清せ初言れるる物語のをもやう  
えのゆわづかみわとあづけり  
きわむちくわめ角すとひそみ野人

あるよかはさあひやうじゆのまある  
えりやくとてうするふりやくらう  
りゆうやくうきつてあうづわ  
化物とよれ物の例よりくられみ  
うそ下へやうふみをもせわの事と  
うきまでうふよ乃うちうす  
るのれやううい小金川

トモ内にあきらめ  
てゐる事  
よひとがよそ  
の事

うらわのまゝに  
かくはくのまゝに  
かくはくのまゝに  
かくはくのまゝに  
かくはくのまゝに

うらわのとて雨のゆめ  
かなむれなまくらう

大德之風  
自之傳而

國朝之風流  
而後人之風流

うきい停長日事とて仕方ゆゆますわう

乙未傳長の記

の  
よ  
み

カニシキ  
サシタマ  
アラシタマ  
アラシタマ

卷之三

卷之三

アラタニシテ  
アラタニシテ  
アラタニシテ  
アラタニシテ  
アラタニシテ

卷之三

其後又得一  
人名曰  
王之子  
名曰  
王之孫

家事よりの済生と中将との向合は頗るある

卷之三

あゝのうゑふ心す

۳

人をもよおへばまづわきくすまてかづれてとあ  
中をかわへるがほんとうのあらじこつあらむ下  
よううきはまに相違ますみよきとくすア邪  
のあいはまのあいこづれぐまをうれうく人  
のふと三みわらてまうけ姓うとおとるお乃  
人金とくま  
中をかわへるがほんとうのあらじこつあらむ下  
よううきはまに相違ますみよきとくすア邪  
のあいはまのあいこづれぐまをうれうく人  
のふと三みわらてまうけ姓うとおとるお乃  
人金とくま



はまくわく初うきのむかひとぞまくす／まくわく  
旅もくと出でとせり／まくわくねとくまくわくま  
人のほれぬくすとそのむかひ／とくわく

みまとくじゆかくまくす／まくわくとくわく  
桜すよと鶯すよとせすやく／まくわくまくわく  
のあくとせやくまくす／まくわくまくわく

くぐくあそくまくす／まくわくまくわく

まくわくじゆくとくて中のみまくす／まくわく

中のみまくと中鷺もまく／まくわくまくわく  
わくまお菊／まくわくまくわく

とく中庸の道／とく中庸の道

とく

頃

とくアあくとく／とくの事／とく  
中のみまく／とくの事／とく  
ロは後國の事／とく圓衛院國の事／とく行道  
うの／とくやう／とくやう／とく  
とく／とくは物の事／とく  
とく／とく家とく／とく  
とく／とくけん／とく  
とく／とくへ府とく  
とく／とく春とく  
とく／とくの事／とく

とく／とく／とく／とく／とく  
オニ所事の事／とく／とく／とく

まへるあがれとてひづれとてかくはくす

のゆゑと

あらうりともよぶ心をあひきくと  
えれも申めの向うれとの名のやさしさを

いふときよくあわやうらひ  
おとほとねりあまたまの所をあ

えあゆみにかまくとよ鬼よまくとよ

おとほ

うちあひてこれあじとあう

うちくゆのとてかくよそひのくわくと  
むとよりあうまきとよきと  
おこなうすむとよくとよくとよくと

まねく宿宿とよとよとよとよとよとよと  
下のとよとよとよとよとよとよとよと  
ゆふみとよとよとよとよとよとよとよと  
ひたよとよとよ

みてあうやと今まきく  
あれとよとよとよとよとよとよとよと  
おとほとよとよとよとよとよとよとよ

おとほとよとよとよとよとよとよとよ  
とよとよとよとよとよとよとよとよ

とよとよとよとよとよとよとよとよ

ういゆひきやくかほとおふるを従あきと  
うれはうは除外してれり  
不自由のせよつまてふう。 オヌ怪文書の御  
元よりすわとまじらうらうが御と  
下の政とお改官しておゆうとまきて  
方様の勢うとうて二三の事とまてほうう  
おしとアヒトうらうふ年をうらうとまけ  
おしとうらうとまけうらうとまけ  
ひあくよ心をも通すとま

でこの處の中のあらとま  
天下なりとまけらるあやてもまし  
きくやくやまくやまくやまく

あらとまけらるあやてもまし  
マリハナケアキハナムサトマリ  
ニキハナケアキハナムモ  
五今のかまくらむきくらみくらのあらとま  
はまくらむきくらとよせ信るめううけとま  
ゆくのあらとまくらめううけとま  
てまくらとま身へまくらめううけとま  
あくまくらめううけとま身の事とま  
あやてもまくらめううけとま

卷之三

卷之三

おとことおとこ

之  
自  
不  
可  
以  
不  
知  
也

ふ  
ひ

ゆるやかうむわくあらわす  
五方半つまてよりす  
わあくいふみふらひじ  
けくわくめうりかせんと  
心よきもとよのかなとよ  
りよきとよきよきよ  
りよきとよきよきよ

あをれやうかこちぢやうるわん

いもむとよしとまふあまの色あきとあがめ

まひうみはるひゆ

まちくまてまくます

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

下卷

てあがまをうなづく  
れりあひきのまへすよ  
るいゆかせど

正月の元日は  
朝食をとる  
が最も多くて  
朝食をとる  
が最も多くて

アラキカミモカ  
ヒルカニシテ  
ホリヒアムチカ  
トウカヒタマ

たまはりとくにまの男とあら  
とくねふとくねれい中  
とくねふとくねみのうれ  
とくよだとくよだとくよだ  
中持ふけ  
才吉照や中わの志兵衛領納

かわへとあつたもあつれども  
さもあくをたゞすまうやんとくらえ  
まきは女の男のゆきひすあらとまち  
うんちくアヒミズとてとてとて  
もしゆうすうあいひぐれの中身のまくらと  
のりやくじあみうちのうと思ふもひま  
のうとくまくまくまくまくまくまくまく

ひのくものあへどもせよう  
一やつ半よひの物と  
やうよう博多博達のちよひ  
よきの事みよひてわ

才へ候ふ事なれば物はわんか乃  
」あひて考のう」何とゆゑをたゞもあら

うのゆめのほふ三車 一門のたゞとくま  
みよ一章了序 了了有じて中根の色向  
須喜提述梅延葉月連 やし信解品葉  
予味あすてを味統の述承技記 了よ同屬化一因  
化成今あけふるをまくを印印通智傳佛と  
如來の法華と統りてかくのゆは退居  
すかくの事と統りてかくのゆは退居  
統はんきて圓滿の七日とくに因縁とま  
てト根の千二万人の沙界の技記 了よの理  
とまよるもとてかくのゆは退居  
因縁とくにとくに三月のすまの物語のむ  
あふあくわくせ俗文字の葉行持譜の理  
思ひてまきり下  
もれり下

日久物

御方の工事も直達の苦難の有りと  
西多云畫小在、乳門内東晚晴書

別有五位參人續

也

雅集の記を天承元年十二月廿一日仰取締事一難憶也  
一言語已終仰金是より望云甚矣某は不廣有思也  
其上平十於年江舟自廣之者不以其實名、魚肉取販有賣聲并

風入深江見て廣河を見、廣河の方也。深江見  
け野筋山かへり。廣河云々不敢。口占深江  
可なべ廣河の純見之稱。不敢。中深江曰是云也。食也。故  
レニス  
角食。凡定署其の事。仍放ノ見。角已有其者。取人  
謂深江。緑乃おれじ道也。今至南國。五重廣河をよみ  
重也。今葉墨の佛事。とある。とある。

二つ女我とまの物とてみて男の心よきす  
うかと心とさうしてみじくぞきうる事（おもむきと  
ちやのひよこりよあんわらわ

おもいの女房のよさうのへあらひ思はば  
こころひきわざきよそくとよりとよせ  
かねすまつねうをひとあらひあらひとあら  
はまうらうかくの男のよさくまよとあらひと  
しろそめとりはうむれひとあらひとあらひと  
うじまわらうめづらうめづらうめづらう  
あやうゆづく

うじまわらう男のよさくまよとあらひと  
人女の男のよさくまよとあらひとあらひと

け海抄の説くと竹口

ひもくじかひそとえぞくひあわつきよみとく

たあくわくよすとわくす

董承後漢人象と貯候か文苑就主（シカウラ）貸錢一万以萬

遭遇一婦人來れふまよと子供詣主人今徵候三百足取

債一月の畢歸永而去ま乃に成天之徵女徵半至孝天帝

令救助右債債言訖凌宣而去

中わうわうふくのだりわよふと キナ四半世の  
の向

アツムハシヒサクアキヒタスモアキヒアキヒア

モカカカサウシモカカサウシモカカサウシモ

多うもくさかわわわ

けんと物とあらわすとよと  
とたゞがれりみちのとよとれよ  
きあいとくわねもとあはねわる  
のうづらひとくわ

そとすあはまくとく  
牛士腰をなれ  
こぐるまのとくらとくわく

猪くさとくさとくさとくさ

こゝの金きやとすんちとく  
月をとくわくわくわくわく  
女とくわくわくわくわく

わくとくわくわくわく

あはうせうひのとよとよとよ  
寒水とすくまつてみゆまくと一  
糸ある清水と二糸万里がほよ行うと  
ほよとく嘴と文選人賦云時瓊華注云食

文章心とくわう

律乃とく  
えむせう催すの律とく

呂  
絃酒

竹はせうな  
五音調音う／＼あくと音のま  
とととあらたううれい音とつわせしとくあ  
のせうはせうア月のあらわたううれい音  
とめうめうせうせうせうせうせうせう  
音のまくらふとくわくわくとくわく

事と云ふ事  
何處かよ  
うがおも  
の事

月と空の事  
月と空の事  
月と空の事  
月と空の事

の男

七歳後年少  
七歳後年少  
七歳後年少  
七歳後年少

中將方舟の如き  
才十二歳也

中を絶ゆかず  
音節の連続  
たゞかづかず

中將石の御内書

もまことに女なりとてはちよかうりあ  
わやむく件とまくわらすりてまじてまく  
はま三條やわぬしきありゆらひのまくひて  
まくらまくらんぐくまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

こくまきまわらうまくまくら  
まくらまくらまくらとまくらのまくら事けの  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら  
まくらまくらまくらまくらまくらまくら

或アラホテテクニキモハサキイアシ

オナムソリヤウメの初

カニキトモソリヤウメと思セシム

ナナモ松或ア初

ミツウキタキニキの伎也

ヨリヤウリのちうよと云ひとちうきうらゆ

アリ

ウキリスラムヤマキケルサチの奉事  
吟のやの今をニテスラヒトヨウシヨウ家アセ  
富家アセの得失と徳すくまア家のことより  
嫁娶アセ申よもくあくねすくじくアキ  
ゆ奈とひひよれ失をあくにテモ内

象の安て嫁れドモカトナガシテテモ

申すわきのまうとめりに考あゆ

ソレモセヒヌ家アシカシアシテ或アシ

仕いきセテカシモカシモ

アキアキヌやシトハ事(化文)とも侍は

シカキエノ肩よ折腰體(シカキエノ腰よ折腰體)

アシのキアシモアシモアシモアシモアシモ

シカキエノ肩よ折腰體(シカキエノ腰よ折腰體)

アシのキアシモアシモアシモアシモアシモ

アシモアシモアシモアシモアシモアシモアシモ

アシモアシモアシモアシモアシモアシモアシモ

物語のあらわし

カタハラ  
カタハラ  
カタハラ

うかのりの事  
のゆゑに近野が今半ばよのめむた

進よのやう其の時とされと供進と  
きに在りてよし名とせ信よとひまも守る  
めをみる月よあらは葉をとひて常  
勝すけわゆふに信ふす事とおもひて身  
ひまよまくちよきうきよむるやうに  
ひまよまくちよきうきよむるやうに  
ひまよまくちよきうきよむるやうに

くわやまとお

卷之二

才十八歳也。後之不復有  
丈五經のきみ。

の  
の  
の  
の

お月さるの音節ノ白雲あらはる  
従政ツシキよ行幸ヨウシキあり内ナリ争ハサウふ青郎セイロウ奉スルま

主君有殊恩の御事、（續）余徳と群臣よ  
たまはれおもづかれて、太府騎射の事行

りあやかを思ひやまく  
けあやかにあらわす  
うみのうじとけい

心よ山ね  
かのじとく

えりあれ候  
乃ちかくまき  
あわ毛をうなぎ  
わざあわざ  
らあらあら  
あらあらあら

まことにわが身のうへとあらわすと  
か月のうのうへとまづいとまづいと

重陽の宴は天にまもるが如くおいて内外  
并おほし文人博もんぢやくもんとてす  
やくあく韵のみと様て待ひて文豪  
よまと傳ひてゐるありて秋葉とす席帳のた  
有る葉葉のよもとゆじけは前ノ年年の  
もと瓶のうてうるわしき代々宴のみ終ふに  
うちて重陽の花そ平床とてある事ト平床下  
てまの角とすり作ゆるのうつり  
かきのきとからりとせ 異のうづきとくわ  
うづきの事ふきとくわしてとあくわ

うづきの事とまことうとわゆゆす時  
のあくわとむりかきく(かきく)うきくとくえや  
うきくとくえや(くわく)

ゑはくわくう(くわくう)と 菊臺の事)

うれよううすみけアヒルのうと  
あくわとくわくう(くわくう)とくわくう  
くわくうとくわくう(くわくう)とくわくう  
萬のよもとくわくう(くわくう)

かゆてくわくう(くわくう)とくわくう  
アくわくう(くわくう)とくわくう(くわくう)

中納言の志中(じゆう)とくわくう(くわくう)

故人不以爲子也。子之不孝，無乃與已乎？

二年丙子秋  
丁巳立冬

二年後、鴻臚院の准博士から御内紹の書  
を貰ひて、仰思ふ如く、がく  
ト事やうめぐれのあつたのをうち  
のうちにとらふるゝ事は、従前から

らゆゑの狂院がまことに行ひて思  
て空と二京とお向院のあらそでりふくさうや二京と  
東と西とまゝて西向院とまへりすすに  
めりてをきとまへりたとまきとまへり  
おう湯本院の南と北とまきとまへり  
の向院とよみのまきとまへり  
らとまへりとまきとまへりとまへり  
おう湯本院と二京院  
小とあひれと心と川河八事竹と若葉の鳥  
しむとおの根草と二京院とおはに二京院  
とおはに二京院とおはに二京院とおはに二京院  
おはに二京院とおはに二京院とおはに二京院  
おはに二京院とおはに二京院とおはに二京院

さなづかやすまやふは奥院大入道の正事と  
さあ二条院と早う一き景元物語が半三の  
もとへて相違のまゝ。黒<sup>後</sup>はつじゆと  
ぬ不<sup>後</sup>ほじゆとりむのをやううまに二条の小京  
橋<sup>後</sup>東と二条とは向てうりむきとてうひ  
さりふるお橋とてうひとをまよひやまれ  
て舟主のひしてうの院<sup>後</sup>はつじゆとつは奥  
院<sup>後</sup>はつじゆと二条院とおれと三前  
とくとくがくとくとくとくとくとくとくとく  
ゆくには奥院と二条院とく准持<sup>後</sup>りゆく

中川のわらううつゑさん

雅信<sup>後</sup>

景元物語中川半三のまうらひあがみ

ちうてくまうけのひがんとつりくらのま  
てすまげのまや水<sup>後</sup>はつじゆとあうてくわ  
アラシ<sup>後</sup>はつじゆとてうととい思<sup>後</sup>はつじゆと  
象<sup>後</sup>はつじゆとけ物語の中川<sup>後</sup>はつじゆとくま  
とすやうせんまういとくとてくとくとく  
景元物語とお邊方半三  
もくく経てわらううつゑさん

半三のまあとのひがんと経てくわうとくま  
とくわうとくまとくまとくまとくまとくま  
とくわうとくまとくまとくまとくまとくま  
とくわうとくまとくまとくまとくまとくま

まもひとくわうとくまとくまとくまとくま

かくやつうとある。一終まじめにかねて  
うじとる。事あく  
行ひと事のゆきがりぬまにあつた事は  
或鄰の事であつた。あつてまづなり  
うじとる。

桃園城の主の御女あつておふくろおみが  
ウキをけめむ。さてとひておまえ  
ハ桂の木の外院。まことにうそですまう  
おつみあうの事。さればおみの毛は  
うるやかとけん。わざとつぶしも本  
の毛よつてとまう。一け時もうかにあ  
りとまゆきうすくらすがある。

くりとくは物アリ。行つてうますや  
とまう。アリ。とお原のう(見て)まく  
かねす。

まくちゆうもくうくまくみて  
ほせの木アリ。うくみてとお原のう(見て)  
ともとまくとおんとく思ふ。うかとお  
あくとまくたまく。まく。行せん。まく  
うな寝食の事。まく。かく。りんとくとく  
うあくとまく。やかくとまく。うかとお  
まく。まくとまく。まく。まく。まく  
まく。まく。まく。まく。まく。まく。

仕事の事はあとつても宿を次官も候  
月を取て後國の守り關の内にすり長官の事と  
うあるとさぬがよつてくまびりとつう  
はアの事は又は武師とつるべ列が  
えぬねかとやうしのむらわあや  
まうまは正令をうつしわらも真とす  
せうがく経下に羽根ととくめらわや種  
あつこひとすてのあくめく、あくこへま  
きみをゆくは 小志、つぐるを  
ゆく人ふゆすいわう、まほらまほらのま  
きみをとせじりゆくよがくいと  
くわくとくわく結けきじみをゆくもあ

女と男のアホと達をうの席アホとあ  
トナ天照大神のまつもとつ天照大神のあゆ  
そゆもやとくわく神とくわく神とくわく  
えアホとくわくとくわくわ、それ安原の内  
じゆく角くわくとくわくわ、アホとくわくわ  
くわくとくわくのまつもと  
くわくとくわくのまつもと

小志、つぐるを  
ききくゆくのまつもとくわくとくわく  
くわくとくわくのまつもとくわくとくわく  
まろくわくとくわくとくわくとくわく  
ききくゆくのまつもとくわくとくわく

いとまのむかしの日はおとぎりうつ  
おとづれやほんとおもひすきうす  
月あつ月あくまうわすま  
わざわざ月のまづきあらう  
權けんりきのうゑんせんやくわ  
とふぶなま(侍)  
きのむねみのう(初見)のう  
よもじとゆくとゆく  
羽(え)て(き)て(と)の(く)の(く)  
さか(か)か(か)か(か)  
ま(ま)ま(ま)ま(ま)

花鳥餘情第三  
宣憲

卷一

筆の義は先横一筆で左から右へあらわすものと  
のよどりだけ物語るに引て筆の通あるをいたる  
まゝある事とすをもとめられて多美によくやう  
トシ又未の事のゆゑ。様は豈と云ふありま未搞毛  
の表ひよるやうに右へ引かれて左へまよち

三石はまよひの事とて  
のむくらゆるやの美に

の音を歌ふてゐるやう

のれどもねまにあらわすよおう  
の角はけあてさきゆまのけ川の角はく

卷之三

か  
の  
う  
れ  
を  
も  
う  
か  
の

うきのそと原中  
かおりあはて風の匂  
ひのよし東北の事も

卷之三

精鑒の卷もは前あらそひす  
物の物くのむかへ行は」傷側  
とひてあらゆる心とて金き  
けある

かくはうきよ  
のまへる  
ゆゑに  
かくはうきよ  
のまへる  
ゆゑに



筆の手はあやか  
筆の手はあやか  
筆の手はあやか  
筆の手はあやか

はひてかくすをとましと車を  
半郭とてけらみ郭とあくい半  
のきとまはなねけふあ  
ゆきとまへるよ  
すとてうのまくまあふとあ  
原のまくわらふと物とけらすと  
まくまくとあすと  
うのとかもとけ  
はまくわらふと  
けまくわらふとけ  
かまくわらふとけ  
も



蒙古文

人  
也  
不  
可  
以  
不  
知  
也

ひ  
ひのうづくまわらひ  
雨あら物の内事あ  
心とよきとあらつま  
やまくまのよきと  
思ふと思ふ  
心と思ふ  
れいにまのねとつまゆ

うそであります。心地  
うれしさは、心の喜び  
ゆきひがいの物ととて余り  
ます。

よしのわくとまゆ  
ひきのわくとまゆ  
ひきのわくとまゆ

歌をうたふのうとをわざひくのう  
あらゆるのうといたるのうとあらゆる  
毛詩を有<sup>ス</sup>同車<sup>タクサ</sup>舞<sup>モリ</sup>花<sup>ハナ</sup>と行  
わざひくのうといたるのうとあらゆる  
かわらのうといたるのうとあらゆる

のあまかにあらわす  
思ひやうとさうさう  
うきよへりあふ  
うきよへりあふ  
中情は  
りふゆとてか物  
そぞくはまの神  
ひ  
るよゆうゆ  
よゆうゆ  
あわゆ  
よゆうゆ



おまかでうといまくはあらふうあるてまく  
にとあひれ林原下よみゆうとうじゆうまく  
ちるおわらわよしゆまのさうめい  
ゆゑあそせむねつうゆまのうりうれさま

こまく

作月よ月よ極くさあくわれ年と  
きよよまくじよみやとねをすちま月  
もむら月ようりとくくいはまじうてやま  
ゆくよすやうれすまのあまくわ月あ  
うきをへく月うきくやうてうてうな  
ひくみくまくや  
うきをりくくまきの あうまね袖うく霞

あみやくみやく扇うくまくやうてやまく  
かくれくひよやあくつま  
ちよあくらゆくもまわく扇うくまくや  
りくそくまくもまわく扇うくまくや  
うくまくまくまくまくとよまくまく  
うくまくまくまくまくまくまくまく  
あくまくまくまくまくまくまくまく  
もまわく扇うくまくまくまくまくまく  
あくまくまくまくまくまくまくまく  
もまわく扇うくまくまくまくまくまく  
うくまくまくまくまくまくまくまく  
うくまくまくまくまくまくまくまく

あらまやにうつて かの物のうへりよ  
わらひとゆる

あらまやすわじきのうへりよ  
え一刻よ内里時のみを奏すものらむ  
のうへりよあらまやいせんとい名錦とよ望名  
よほの井やくせんといふとよもれま  
れまよのうに御口の井や行うる  
みよとよ名錦とよがよそとよもれま  
あらまやをえの刻のうへりよ  
ねようへりよ

角くづ くづとくづとよ物のうへりよ

あらまやうへりよ

もく行くわとくわくわ  
延祐八年清淨院奉宸院後自掌法而作清潔  
ある時國大人是青是神であると見事郭  
王祀

もく行くわとくわくわ  
何事ありあらまやがゆくわ  
うらまやからんとくわくわりし所するもとある  
物ものはる美待みまつめ驚定初林後とくわくわ  
三りもわらまやとくわくわ  
神じんもくわくわとくわくわ

おまわらまやとくわくわ  
八月十六日の事

九月八月とてうらまやとくわくわ

あれより下りて金剛山よりおまか  
しゆきまで それよりはまのすがくまわ

まといひす

まよひやねりわらうわらうん

右とおもふとあまうすすまく

うきよとつむり事

われとよめのうくうねぶ

せむみを元別に春声生別常慣てる約

りきり生えても別ぐまくおもひ

ほくとてかく 雪舞川の邊へ彷彿行候とよつま

としきも川のほくとてかくよ

あそびくとて さうとて冬月をなほ

こけ満てりだく

あそびくとて

御すあり日本はははの寒うきをうかがひとよ

うきゑあり

不ぞいとおとくとくとくとくとく

あいせじとくとくとくとくとくとくとく

のくとくとくとくとくとくとくとくとく

かくねとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとく

國朝之書  
卷之三

蒙古文

卷之三

徳の事は  
かくのやうに  
あらわす  
がむかひの事

わくは  
くわく  
くわく  
くわく

かくのうは  
羽衣れ赤八重

ムラカミの事は、さういふ事で、

おおきな  
おもてなし  
がんばれ

かのとすみ  
十月の雨  
かのとすみ

明郭子敬之序曰  
宋高宗皇帝御文稿  
粹後

東方先生之書  
卷之三

生の事  
下納

二月廿日  
天晴  
風微  
氣溫  
約零下  
度  
寒  
天  
氣  
不  
好  
但  
天  
晴  
可  
以  
看  
書  
寫  
作  
等  
待  
天  
氣  
變  
好  
再  
出  
門

俗名增島彥帝道室秀夏記念

